



TITLE:

京大広報 No. 724

AUTHOR(S):

京都大学企画・情報部広報課

CITATION:

京都大学企画・情報部広報課. 京大広報 No. 724. 京大広報 2016, 724: 4661-4676

ISSUE DATE:

2016-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216210>

RIGHT:

京大広報

No. 724

2016.7



大学院農学研究科附属農場 移転記念式典を挙げる 一関連記事 本文4672ページ

目次

さあ、あなたは、どの「窓」から京都大学を覗いてみますか？ 宇治・遠隔地キャンパス担当副理事 津田 敏隆……4662	
〈大学の動き〉	
名誉教授懇談会を開催……4664	
国連食糧農業機関(FAO)と包括協定を締結……4664	
国連食糧農業機関(FAO)との包括協定締結を記念した持続可能な「食」と食品ロス削減についての共催イベントを開催……4666	
〈寸言〉	
ゲバ文字の名人 いしいしんじ……4667	
〈随想〉	
千年の木は千年もつか 名誉教授 今村 祐嗣……4668	
〈洛書〉	
タイ・シリア・ニジェールそしてベトナム 真常 仁志……4669	

〈話題〉	
医学部附属病院、平成27年度病院長賞表彰式を挙げる……4670	
医学部附属病院「母体胎児集中治療室(MFICU)」を設置……4670	
「竹の環(わ)プロジェクト」を開催……4671	
大学院農学研究科附属農場 移転記念式典を挙げる……4672	
全新入生に一斉に救命講習会を実施……4673	
京都大学 ASEAN 拠点から国際交流基金バンク日本文化センターへ学術情報メディアセンター開発 CALL (Computer Assisted Language Learning) 教材を贈呈 ……4673	
平成28年度京都大学創立記念行事音楽会を開催 ……4674	
〈資料〉	
平成28年度 総長裁量経費による採択事項…4675	

巻頭言

さあ、あなたは、どの「窓」から
京都大学を覗いてみますか？

宇治・遠隔地キャンパス担当副理事 津田 敏隆

1. 京都大学の「窓」

本稿の表題は、毎年10～11月に宇治キャンパスおよび全国の隔地施設で行われている公開イベント「京大ウィークス」のキャッチフレーズです。第1回の2011年以来使い続けていて、2016年のリーフレットでも下記のように一般の方々に参加を呼び掛けています。

「京都大学には、北海道から九州まで全国に数多くの教育研究施設があり、本学の多様でユニークな教育研究を担うとともに、それぞれの地域では「京都大学の窓」として親しまれています。今年も、10月8日(土)～11月6日(日)に24の施設が、さまざまな公開イベントを行います。窓の向こうに、あなたの知らない知の冒険がひろがる！この機会にぜひ、お楽しみください!!」

隔地施設を京大の「窓」にたとえています。山極総長が提唱しておられる「WINDOW」構想に照らしてみますと整合する点がいくつかあります。例えば、

WILD & WISE: 未知の世界に挑戦できる実践の場として、学生への多様な教育環境を提供し、野性的で賢い学生を育成します。

Natural & Noble: 自然に親しみ、広く深く学び、高い品格と高潔な態度を身に付けられるよう、全学の意識を高め、魅力あるカリキュラムや快適な学びの環境および制度を作ります。

という2つの目標と良く合致しますし、さらに、

Diverse & Dynamic: 多様な文化や考え方を受け入れる。

Original & Optimistic: 分野を超えた多様な人材の協働、未踏科学領域の開拓



といった理念にも貢献できると考えています。

2. 隔地施設の概要

さて、本学は京都市内にある吉田キャンパスと桂キャンパスに加えて、宇治キャンパスを構えています。

さらに、原子炉実験所(大阪府・泉南郡熊取町)、霊長類研究所(愛知県・犬山市)、および生態学研究センター(滋賀県・大津市)が独立したキャンパスを運営しています。

また、理系の7部局(農学研究科、理学研究科、工学研究科、防災研究所、生存圏研究所、フィールド科学教育研究センター、野生動物研究センター)がそれぞれの教育研究の活動拠点として全国各地で約40の隔地施設を運用しており、本学の大きな特色の一つであるフィールドワークを実施しています。

3. 隔地施設の公開イベント「京大ウィークス」

「京大ウィークス」は宇治キャンパスと隔地施設における教育研究活動を一般公開することを目的とし、研究成果を分かりやすく解説する講演会や大型・特殊設備の見学会、自然観察会など、様々なイベントを企画しています。もっとも、これらの広報活動を一挙に始めたのではなく、従来からそれぞれの施設で行われてきた公開イベントを10～11月の約1ヶ月に集中して行うことにしました。10施設が参加した初年度は実施期間が週末2回にまたがる9日間だったので「ウィークス」と呼んでいます。最近は教職員が配置されているほとんどの施設が参加していて、実施期間も4週間に広がり、なんとか1ヶ月を超えない期間で納めています。京大ウィークスを通じて、北海道から九州に至る広い地域に分布する隔地施設の間で、相互理解が進むことを期待しています。

2015年度までは各施設で行事にかかる経費を積算し、全学経費に予算要求していましたが、今年度か

ら本学全体の行事として安定的に運営費が配当されることになりました。これにより、イベントの継続性が担保されただけでなく、今後、公開イベントに用いる展示パネルや機器類の整備も長期的に計画できるでしょう。一般向けの公開イベントが週末に集中するため、担当される教職員や学生の方々には負担をお掛けしていますが、各施設で展開されている様々な教育研究活動ならびに社会貢献を情報発信できるいい機会になっていると思います。

4. 火山研究センター(阿蘇)の被災

昨今はマスコミで原子炉実験所、防災研究所等をはじめ研究施設の活動が紹介されており、「ここにも京大の施設がある」と隔地施設が知られるようになってきました。しかし、特に衆目を集めたのは、今年の4月14日に起こった熊本地震に端を発する一連の災害のなかで報道された、阿蘇の火山研究センターの被災ではないでしょうか。

理学研究科附属地球熱学研究施設では別府と阿蘇で教育研究活動を実施していますが、後者の火山研究センターは阿蘇山研究の重要な拠点として1928年以来90年近い歴史を有し、阿蘇カルデラ内で共同研究やフィールド教育を行ってきました。4月16日の2回目の震度7の地震により、2012年に国登録有形文化財に指定されたセンター本館は壊滅的な被害を受け、施設にアクセスする道路も陥没しました。しかし、教職員自身も被災しているなか、阿蘇山の監視体制の復旧を優先し、4月末には仮事務所を開設して観測業務が再開されたそうです。気象庁等に火山監視データを供給する使命を果たすべく最大限の努力を続けておられることに敬意を表します。本学で緊急対策が講じられたのに加えて、文部科学省からも補正予算による手当がなされましたが、完全な復旧には歳月がかかると思います。全学的な支援を継続して頂きたいと思います。

この火山研究センターの例でもわかるように、隔地施設はそれぞれの科学的課題を追及する教育研究実施の場であるとともに、安全・安心な社会の維持と構築のために必須の業務を担っている場合があります。また、地域と連携しつつ防災教育等による社会貢献をしています。

5. フィールド教育

隔地施設は特色のある研究テーマについて、大学院生や外国人を含む研究員等の重要な研究活動の場となっています。同時に本学の学部専門科目および教養・共通教育にも活用されています。例えば、国際高等教育院における少人数科目(ILASセミナー)のなかには、学生を隔地施設に引率し、体験学習を通じて我が国の豊かな自然に触れさせる、あるいは、特殊施設や大型設備を実見させるものもあります。教室での講義で得られる知識に加えて、将来に活かせる有益な実地経験を得る機会が学生に与えられています。

6. 隔地施設の職務環境

隔地施設は、広い敷地を必要とする大型設備や特殊装置を備えているケースや、地域性のある研究テーマを扱うために京都市から離れた場所に活動拠点を設けています。その結果、主要キャンパス等では当然のインフラを十分に利用できない場合があります。特に、情報通信が大きな課題になっており、都市部から離れた施設では高速回線が利用できず、情報量と通信速度に大きな格差が生じています。これは教育研究活動および関連業務に不便であるばかりでなく、災害等の異常事態における教職員・学生の安否確認にも支障をきたします。情報環境機構の努力で、隔地施設の状況調査をもとに、個別対応を検討することで徐々にICT環境が改善されつつありますが、こういった digital divide が生じていることを全学的な課題として認識する必要があると思います。

また、隔地施設は、規模は小さくても、個別の事業所として対応すべき事項が多く、それらを少人数の教職員が対応しています。ICT環境以外に、勤務条件にも格差がある場合があります。各部局で対応を検討されていますが、本学としての支援も重要であり、教職員のご理解とご協力をお願いする次第です。

大学の動き

名誉教授懇談会を開催

6月21日(火)に百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて名誉教授懇談会を開催し、89名の名誉教授の他、総長、理事、副学長、部局長等あわせて125名が出席した。

懇談会は、山極壽一総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、宮武義郎名誉教授による乾杯の発声により始まった。

会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに終了した。



挨拶をする山極総長



乾杯の発声をする宮武名誉教授



懇談会の様子

(総務部(総務課))

国連食糧農業機関(FAO)と包括協定を締結

本学と国連食糧農業機関の協定では、いくつかの活動計画が企画されている。(1)気候変動の水資源と農作物に対する影響評価：FAOが行なっている各国に対する気候変動影響評価プログラムに関して、FAOが開発し、京都大学を中心に改良・適用されている収量予測モデル(iGAEZ)などを用いた気候変動への農作物・水資源に関する影響評価を行う。具体的には、ワークショップの開催、各国影響評価への協力など。(2)農作物分野でのモデリングに関する協力：上記のGAEZ / iGAEZのほか、FAOが開発したCO₂排出量推計モデルEx-ACTモデル、GLOBWATモデル(地球規模水資源モデル)などを利用した研究協力。そして(3)遺伝子組み換え食品への影響評価を含む、食品安全性への協力：FAO

が運用しているGM(遺伝子組換え)食品プラットフォームへの研究協力、専門家の派遣などで、10月9日(日)に日本学術会議で本テーマのシンポジウムを開催し、FAOから専門家を招聘することが予定されている。

6月14日(火)に本学を訪問した本協定のFocal Pointであるチャールズ・ボリコFAO駐日連絡事務所長は、本学宇宙総合学研究ユニットの土井隆雄特定教授(宇宙飛行士)と面談を行った。平成28年3月まで国際連合宇宙局(UNOOSA)の宇宙応用専門官であった土井特定教授は、現在本学で有人宇宙活動のための人材育成プログラムを立ちあげ、さらに宇宙農業に関するプロジェクトの可能性を探っている。今回のミーティングにおいて、本学との提携の項目

として、宇宙農業に関する協力も項目にあがることが示唆され、継続的に連絡をとりあってゆくこととなった。



意見交換を行うポリコ所長と土井特定教授

6月14日(火)に山極壽一総長が署名した協定書を、FP(Focal Point)である山敷庸亮 大学院総合生存学館教授、阪井康能 大学院農学研究科教授、櫻井繁樹 大学院総合生存学館教授らとともにFAO側のFPであるポリコ駐日連絡事務所長に手渡した。

FAOとの交流は、平成26年3月に阪井教授・山敷教授がFAOにて講演会を開催したこと(下記FAOホームページに掲載 <http://www.fao.org/partnerships/details-video/en/c/220393/>)、また平成26年の総合生存学館国際シンポジウムにてカコリ・ゴーシュ(Kakoli GHOSH)アドボカシー・キャパシティーデベロプメント パートナーシップオフィス(権利擁護・能力開発相互関係省)学術的研究機関コーディネーターを招聘し講演いただいたことなどがある(以下URL参照 https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/symposium/01.html#sympo_3rd, https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/img/symposium/Outcomes_Report_3rdsympoR.pdf)。

またその過程で白石晃将氏(大学院農学研究科応用生命科学専攻博士後期課程3回生、思修館プログラム第1期生)が、FAOのFood Safety and Quality Unitにて、1年間のインターンシップを行い、その間遺伝子組換え食品の安全性評価に関するデータベース(FAO GM Foods Platform)の更新と、ヨーロッパでのワークショップの開催、その他関連業務に積極的に貢献したことも重要な要素である。(またその様子はFAOからビデオが送付され、思修館ページにて紹介されている。(<https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2015/12/18/20151218>))

ポリコ所長は、「FAOにとって京都大学との協定は、国際連合のミッションとして、特に将来の世代の食料安全保障に対する意識的教育を包括的に行ってゆく上で非常に重要なパートナーシップであると確信している。京都大学は、すべての分野、特に農学分野の研究において世界に広く知られた大学であり、そのようなパートナーと共同でプロジェクトを行ってゆくことは非常に重要である」と考える。私が考えるもう一つの重要な使命は、現在FAOを含む国連機関で働く日本人が、その重要度と比較して非常に少なく、若い世代の学生を育て、将来FAOで働くであろう人材を育成することである」、山敷教授は「FAOは国連機関の中で特に食料に関する統計処理で重要な役割を果たしており、教員や大学院生を巻き込んだ共同プロジェクトを行ってゆく上で非常に重要である。この協定締結によって、どれくらい京都大学がFAOに貢献できるかが重要である」、阪井教授は「農学分野においてFAOは非常に重要な国連機関であり、FAOとの協定を元に京都大学が食料安全保障問題に直接的に貢献できるチャンネルが増える」と考える」、櫻井教授は「我々が行なっている国際人材育成プログラム「武者修行(1年間の海外国際機関等での研修)」において、人材が育ち、国際協力に貢献できることは大変嬉しい」、現地に1年間滞在した白石氏は「国際機関でこのように活躍できる機会を与えていただき、研究だけではなく、実質的に世界の食料安全保障問題に関われたことは非常に重要な成果であった。これを通じて、将来国際的に貢献してゆきたい」と話している。



記者発表の様子

(大学院総合生存学館)

国連食糧農業機関(FAO)との包括協定締結を記念した持続可能な「食」と食品ロス削減についての共催イベントを開催

本学と国連食糧農業機関(FAO)との包括協定締結を記念して、本学キャンパス内で、持続可能な「食」と食品ロス削減についての共催イベントを開催した。6月はエコ〜るど京大が主催する環境強化月間であり、そのメインイベントの一つとして、6月14日(火)に「ぺころじーディナーショー」をFAOと共催した。冒頭は、酒井伸一 環境安全保健機構附属環境科学センター長による乾杯があり、エコ〜るど京大の経緯と、FAOとの共催に関する祝福があった。次に協定のフォーカルポイント(以下FP)である山敷庸亮 大学院総合生存学館教授によるFAOとの交流の経緯、そしてチャールズ・ボリコ FAO日本リエゾンオフィス長・国連食糧農業機関(FAO)駐日連絡事務所長の紹介があった。

基調講演としてボリコ所長による食品ロスの世界の現状の講演にはじまり、続いてセイラズ・フォー・ザ・シーの井植美奈子氏による持続可能な漁業・シーフード食についての講演が行われた。ボリコ所長は、食品ロス問題は私たち一人一人が気をつけ、それが何百、何万と集まることによって解決への一歩が踏み出せるとの観点で、世界の食品生産量の3分の1にあたる13億トンが毎年廃棄されている現状を解決してゆけるという観点での報告があり、参加者は熱心に聞き入っていた。さらに食品ロス削

減のため、大学院総合生存学館(思修館)の大学院生野村亜矢香氏による「料理」を使った食品ロス削減のアイデアを提案した。また地球環境学堂・学舎の学生がエコ・レシピを紹介し、その後京大カレー部によるデモ、でこべじカフェなど、学生たちも積極的に参加した。

FAOのボリコ所長は糠漬けの天地返しのパフォーマンスに挑戦し、日本の文化のアピールにも協力された。

最後に主催者である浅利美鈴 大学院地球環境学堂准教授による閉会の挨拶があった。

この「ぺころじーディナーショー」は、野村氏がFPとともにFAOローマ本部にて直接Cookingをテーマとする食品ロス削減イベントを提案し、その後エコ〜るど京大担当の浅利准教授らに相談し、皆で提案書をFAOに提出し公式に承認を受けたことにより、FAOのネットワークでも紹介され、また国連ロゴの使用を許可されている。主に大学院生が企画したワークショップが、そのまま国連機関の正式な活動として認知されることは非常に珍しく、その提案をサポートした地球環境学堂・総合生存学館教員との連携、また多くのエコ〜るど京大実行委員会の学生たちがこの記念すべき日を盛り上げようと努力したことが成功の要因といえる。



講演を行うボリコ所長



糠漬けの天地返しを行うボリコ所長

(大学院総合生存学館)

寸言

ゲバ文字の名人

いしいしんじ

吉田寮の前を通りかかると、寮生募集の看板が「カフェ文字」になっていて、思わず立ちつくしてしまった。

うまれが大阪市内の南部、ということもあって、いわゆる「ゲバ文字」には、小学生のころから親しんでいた。中学校の校舎に躍る、真っ赤な「七里塚闘争！完遂！」の文字はいまも目に焼きついている。当時はあれが「大学生の字」に見え、阪大や大阪芸大にいったら、学生はみんなああいう字で「大学ノート」を真っ黒にするものとおもいこんでいた。

大学ノート（いまもそう呼ぶのだろうか）の特徴は、無味乾燥にみえて、実は主張の強い、横書きの罫線である。「このサイズで、横向きに書け」と、ノートのほうが完全にルールを決めている。外国語、数式、概念図と、大学で習う科目は、横書き＝西洋式、といった固定観念が、ひょっとして明治期あたりから、連綿とつづいてきたのかもしれない。

いざ大学にはいってみると、ゲバ文字でノートを取る学生などいなかった。自分では、あの字でノートを埋めてみたかったので、吉田寮に、立て看板の名人がいる、ときき、是非紹介してほしいと先輩に頼みこんだ。

名人は「こどものころから、勉強ばかりさせられているうち、頭に火がついてこうなってしまった」という感じのひとだった。話がまるで通じない。けれども、どうにもなんだって楽しそうだ。「舞踏とゲバ文字の共通項」について、嬉しげに、横をむいて語りながら、名人の筆は白ペンキの上に「革命」「粉碎」「打倒」など、刺激的な文言を書きならべていく。見ていてふと「横書き、縦書き、みたいな区別は、手書きの文字にはあんまり意味ないかも」という気がした。字を書く、その作業のなかで、名人の手、腕、そして身体は、横向きにも縦向きにも、流れるよう



に揺れ、それこそ「躍って」いたからだ。

字をおぼえたての子どもをうしろからずっと見ている。縦二本の「い」、左向きにあがってはさがる「へ」。子どもの全身は、筆記具をもった側の肩を中心に、その文字のかたちどおりに動いていく。からだがその文字のかたちに「躍る」、もしくは、その文字のかたちそのものに「なる」。幼子のころ、このように全身を使ってかいていた文字を、長じるにつれわれわれは、だんだんと腕で、手で、手先だけを躍らせて、記すようになる。

とはいえ、手書きをつづけるかぎり、幼い日の「踊り」の記憶は、文字を書くたびにからだの内奥にこだましつづけるだろう。ゲバ文字であれ楷書であれ、名人とされるひとの字は、きっと幼子のからだに似ている。だから、何を書いているかが、いつもみずみずしく、線の一本ずつが真新しい世界をひらき、そうして、どんな重力からも自由である。

僕は小説を書きはじめるとき、白紙に、エンピツで、縦だったり横だったり、ときには斜めだったり、物語が進みたがるままの方向へ、文章を連ねていく。ときには模様や、なにを意味しているかわからない記号が混じったりする。ふりかえってみると、これは、京大の入学試験の、数学の時間に配られる「計算用紙」にそっくりだ。白紙が配られるなど、小中学、高校時代にもなかった。十八歳だった僕はおそらく、白紙をみつめながら、ほんとうの大学ノートって、こういうもんだったのか、と目をみはったはずだ。

大学とは、自由とは、これだと。

入学後、数学の森毅先生に、「おまえなあ、あの計算用紙なかったら、ここにきてへんわ」と笑われた。数学の試験問題が、いったいなにをいっているのかさえわからなかった僕は、時間をたっぷりかけて「時間がない、とはどんな感じか」というエッセイを書いた。縦書きだったか横書きだったかはおぼえていない。あとで、森先生が「こんな子おも、ひとりくらいは」と、拾ってくださったと、先生の研究室のひとからきかされた。

（いしいしんじ 作家 平成元年文学部卒業）

随想

千年の木は千年もつか

名誉教授 今村 祐嗣

最近、街の中で外壁を木材で覆われたビルや、かなり大きな木造の建物を目にする機会が増えてきた。また、2020年の東京五輪・パラリンピックの関連施設への木材の利用も話題となっている。木材の利用技術の進歩がその背景にあるのはもちろんであるが、それに加えて都市空間で木材を使用することによって温かみや潤いを与えるとともに、木材を使うことの環境貢献が改めて見直されてきたことも理由といえる。

森林・林業・木材の政策面では、今ほど世を上げて木材、とりわけ国産の木材の利用促進が謳われている時代はかつてない状況にある。CO₂吸収源としての森林の役割や炭素貯蔵としての木材利用に対する認識だけでなく、その根底には、戦後の枯渇状況からは想像もできないほど、全国の山で森林資源が蓄積されている状況にある。森林に蓄えられた木質資源はこの30年間で倍の量となったが、そのほとんどに人工林の増加が寄与している。年間の成長量は7,000万～1億m³/年とも予測されていて、計算上、わが国の木材消費は森林が毎年毎年成長する量で充分賄えることを示している。

ところで、わたしが在職していた京都大学の生存圏研究所に、昭和の修理の際に標本として切り取られた法隆寺五重塔のヒノキ心柱の円盤が保管されている。円盤は腐った柱の根元をはずした部分から取られたものであるが、数えられた年輪数をもとに、この心柱は樹齢400年以上のヒノキから採材されたと推定された。そうすると、元のヒノキは3～7世紀に育ち、光合成によって当時の空気中のCO₂が木



材成分に変換され、その後、実に1400年近くにわたって現在まで固定され続けてきたことになる。この円盤を示して、「この中には、卑弥呼が息をしたCO₂が詰まっていますよ」と話すと皆さんホーと感心される。

法隆寺に使われた木材も、建立後、もし、腐ってしまったり、燃えてしまえば、固定されていた炭素は即座に空気中に放出されたであろう。今に残る歴史的建造物は、まさに長期間にわたり木材中の炭素を固定してきたという意味で、地球温暖化の防止に寄与しているといえる。木材をできるだけ利用する、利用するならば長く使う、これは地球温暖化防止の有力な方策である。

建立から永い歴史をもっている日本の寺社建築では、耐久性のある樹種の使用とともに、水の影響を考えた工夫が随所に取り入れられている。例えば、京都清水寺の舞台ではデッキに勾配をつけ、高欄の接合も水が溜まるのを防ぐ構造に、また、床下の貫の木口には木製の覆い板が取り付けられている。さらに、古い木造の文化財建造物では、大修理、中修理、小修理が繰り返され、十分な保守管理によって耐久性が確保されてきた。

千年の木は千年持たせねばならない、というのは宮大工の西岡常一氏の有名な口伝の一つである。そのためには伝統的な建築の世界でも、また、身近な木材を使う現場においても、設計、材料選択、加工、使用、診断、保守のすべてにわたって、木の寿命を延ばす工夫が求められる。木材の耐久性に関しては、ともすれば、何もしなくとも千年の木は千年の寿命があるように曲解されたり、科学的根拠もない手法が喧伝されるケースも多い。われわれは、今こそ、しっかりした科学的な知見と判断に基づいて、本当の木材使用の耐久化に取り組んでいく必要がある。

(いまむら ゆうじ 平成22年退職 元生存圏研究所教授 専門は木材保存学)

洛書

タイ・シリア・ニジェールそして
ベトナム

真常 仁志

アフリカでの調査の帰路、眠れぬ機内でこの原稿を書き始めました。せっかくなので長距離のフライトが苦痛になってきた年齢になっても、飽くことなく海外で調査をしているのはなぜだろうと考えてみました。



私の海外調査デビューは、もうかれこれ20年前です。タイ北部の少数民族の村で焼畑調査のお手伝いをしました。調査終了後、一人旅をしてバンコクにもどった私は、当時バンコクに駐在していた先生に調査の感想を問われ、「人にとっての幸せってなにかわからなくなりました」と答えました。物資もインフラも乏しいにも関わらず、活気に満ちた人たちに触れたからです。その先生には、「初心者が言いそうな感想やな」と冷ややかにコメントされたことを今でもよく覚えています。それ以来、幾度となく海外特に途上国へ私の専門である土壌学の調査に赴いてきました。そのなかでも格別な思いを抱いている国のひとつがシリアです。1993年から1996年にかけて、大学院を休学して青年海外協力隊員として滞在していました。長期の滞在であったため、業務として調査を実施する際以外にも、シリア人と行動を共にする機会が多くありました。私の片言のアラビア語を辛抱強く聞き取り、こちらの意を汲んで精一杯のもてなしをしてくれる人たちに会いました。と同時に、学生であり外国人である私を軽んじる人たちがいたことも正直に告白しておきます。一般化すると陳腐ですが、友人となるかどうかには国籍や民族は関係ないということを実感した国となりました。シリアの今の惨状を聞くにつけ、私の友人はもちろんのこと、軽んじた人の安全も祈るばかりです。

もうひとつの国がニジェールです。サハラ砂漠に接する内陸国で、世界最貧国のひとつです。現在に

至る私の研究の道筋は、この国での砂漠化に関する調査でつけられました。日本はいわずもがな、タイやシリアと比べても生活は格段に厳しいものです。乏しい物資やインフラ、雨季前には40度を越える気温、マラリアなどの感染症。食料が十分でないときには、1日2回だった食事を1回に減らしたという話や日本では簡単に治るような病気で死んでしまうという悲惨としかいいようのない現実があります。現地での調査を進めるに従い、このような貧困が砂漠化を加速させている現実と直面して、砂漠化という環境問題にどういう立ち位置で研究を進めるべきなのか悩むこともありました。将来の環境悪化を防止するために、現在必死に生きている人たちに木を切るなど言えるのでしょうか。これも初心者っぽい感慨ですね。

そのような折、全学共通科目である国際交流科目で、学部生をベトナムへ引率するようになりました。本学へ留学していたベトナム人教員のほか現地学生の協力を得て実施する本科目で経験する出来事は、参加学生に様々なことを考えさせるようです。外国語でのコミュニケーションのとり方を反省するもの、「人の幸せってなんだろう」と感慨を持つもの。私が海外初調査で得たのと同じ感慨を聞いて、改めて思い出させてくれました。結局、今も海外調査をしているのは、「人の幸せってなにか、彼らに教わることもある。でも、よりよい生を生きたくてもできない人たちがそこにはまだたくさんいる。その人たちはもちろんのこと将来の人たちのよりよい生の実現の助けとなる研究がしたい」からで、それはシリアでもニジェールでも変わらなかったのだということ。よりよい生とは何かという難問の答えには、彼らとのかかわりが導いてくれると期待しつつ、モンゴル・ウランバートルの喫茶店でこの原稿を書き終える今、タイの海外初調査で私の進む道が決まってしまったことを思い出し、今年が最後となった国際交流科目が学生の将来進む道に良い影響を与えるものとなるべく、努力したいと思います。

(しんじょう ひとし 地球環境学堂准教授 専門は土壌学)

話題

医学部附属病院，平成27年度病院長賞表彰式を挙行

医学部附属病院は、5月9日(月)に病院長賞表彰式を挙行了。今回が記念すべき第1回目の表彰式で、約170名の教職員が出席した。

この病院長賞は、本院における教育、研究、診療、管理運営等について、極めて顕著な貢献があったと認められる若手教職員又は診療科等を表彰する制度として設けられ、全17組の個人及び団体の推薦の中から3名と4団体の計7組の受賞者が決定され、表

彰された。

表彰式では、稲垣暢也 病院長より、表彰制度設立の趣旨および受賞者の選出方法についての説明後、7組の受賞者および受賞内容について発表があり、表彰楯が授与されるとともに、祝辞が述べられた。

また、表彰式終了後には受賞者全体で記念撮影が行われ、終始賑やかな雰囲気の中で盛況のうちに閉式した。



祝辞を述べる稲垣病院長



受賞者全体での集合写真

(医学部附属病院)

医学部附属病院「母体胎児集中治療室(MFICU)」を設置

医学部附属病院では、ハイリスクの妊産婦をケアする母体胎児集中治療室(MFICU)を設置し、6月1日(水)から稼働した。京都府内では2番目の設置となり、産科の医師1名と助産師2名が24時間常駐し、妊産婦の容体の急変や救急搬送に対応する。

今回設置したMFICUは、施設基準で定められた15㎡を上回る17㎡～19㎡の個室が6床あり、重症妊娠高血圧症候群や切迫早産、重篤な合併症等を持ったハイリスクの妊婦が対象となる。各個室は暖色にするなど妊産婦が精神的に落ち着ける雰囲気とし、また、同じフロアには新生児集中治療室(NICU)も



会見を行う平家俊男MFICU部長(中央)と近藤英治副部長(右)、千草義継産科棟医長(左)

あり、母体と胎児を同じフロアで管理することが可能となった。今後、京大病院では平成31年度に急性

期病棟も竣工予定であり、さらに受け入れ態勢を強化していく。



6月1日から稼働したMFICU

(医学部附属病院)

「竹の環(わ)プロジェクト」を開催

桂キャンパスにおいて竹林保全ボランティア活動「竹の環プロジェクト」が5月14日(土)に開催された。この「竹の環プロジェクト」は、桂キャンパスの竹林保全を通じて環境問題に取り組むボランティア活動で、本学、住友生命保険相互会社、京都モデルフォレスト協会および京都府が主催している。

当日は澄み切った青空に恵まれ、スタッフも含めて約140名もの参加者が集まり大盛況となった。



北村隆行工学研究科長挨拶

午前中は筍掘りに汗を流し、午後からは竹の間伐作業と並行して、伐り出した竹を使った竹細工に取り組み、竹のけん玉や鉛筆立、お箸などを作って、竹という素材と楽しく親しんだ。

参加者はこの活動を通じて山の生態系や環境に関心を寄せるとともに、竹林保全やボランティアの意義について理解を深めていた。



間伐作業



記念写真

(大学院工学研究科)

大学院農学研究科附属農場 移転記念式典を挙行

大学院農学研究科では、6月17日(金)に京都府木津川市城山台の附属農場で移転記念式典を開催し、学内外から出席された110名が、盛大に木津農場の移転を祝った。

平成28年4月に、大阪府高槻市から京都府木津川市にあるけいはんな学研都市木津中央地区へ移転した農場では、学研都市の中核となる先進的な農業生産施設と設備を備えた拠点を構築し、次世代の農業

技術の開発と実証研究を目指すとともに、農学と農業に関わる実習教育の場を提供していく。

式典に先立ち、バスを利用して約25ヘクタールの敷地を回り、太陽光発電などによる自然エネルギーを活用した環境負荷の少ない「グリーンエネルギーファーム」モデルを実証研究する約11ヘクタールの圃場や温室などの見学を行った。

引き続き、附属農場本館で移転記念式典を挙行了した。

はじめに、宮川 恒 大学院農学研究科長が「新しい施設をフルに活用しながら、農業生産における環境負荷の低減と再生可能エネルギーの利用技術の高度化を実現し、世界の農業技術の発展に貢献したい」と式辞を述べた。続いて、山極壽一 総長が「京都大学WINDOW構想のように、分野を超えて異なる能力や発想が出会い、対話を楽しみ協力関係を形作る場となり、大学と地域、ひいては世界の発展につながる施設となることを期待している」と挨拶を述べた。また、松尾泰樹 文部科学省大臣官房審議官(高等教育局担当)、山田啓二 京都府知事(佃 賢治 京都府商工労働観光部文化学術研究都市推進監代読)、河井規子 木津川市長から、木津農場への期待を込めた祝辞が寄せられた。

式典後に行われた祝賀会では、出席者は今後の農業の在り方や農場が担う役割について語り合った。



式辞を述べる宮川農学研究科長



挨拶する山極総長



挨拶する松尾文部科学省大臣
官房審議官



挨拶する河井木津川市長



農場本館



本館3階から眺めた圃場

(大学院農学研究科)

全新生に一齐に救命講習会を実施

4月4日(月)から4月6日(水)に学部新生に対して行われた全学機構ガイダンスの中で、平成27年に引き続き新生2,997人全員を対象とした救命講習会を実施した。今年から救命講習会は40分に拡大され、新生たちは、偶然隣に座った同級生と二人一組になって心肺蘇生のトレーニングキット「あっぱくん®」を使って胸骨圧迫の練習やAEDの使い方の実習を行った。各講習会には毎回およそ60名の教員が、学生のサポートを行った。

講習会を受講した後の学生のアンケートでは、「救命についての知識の向上だけでなく、学部生全員ですることで学部の団結を確認できた」、「将来、他人の命を救えることと繋がると思うと、非常に有意義であると感じた」、「新生同士で交流できてよかった」、「京都大学の先生と初めて直接話しをしたことが嬉しかった」といった感想が寄せられた。

継続して実施できたことは、大学として重要な社会的責任を果たしたのではないかと考える。心肺蘇生のスキルを伝えるだけではなく、「いのち」の尊さ

を考え、講習会を通して同級生や教員らとコミュニケーションを図ることができていた点も意義が深いと考える。

今回の救命講習会は、国際高等教育院の統括のもと、医学部人間健康科学系専攻、医学部附属病院救急部、同病院総合臨床教育・研修センター、環境安全保健機構の教員が共同で運営した。



胸骨圧迫の練習風景

(国際高等教育院)

京都大学 ASEAN 拠点から国際交流基金バンコク日本文化センターへ学術情報メディアセンター開発 CALL(Computer Assisted Language Learning)教材を贈呈

独立行政法人国際交流基金・バンコク日本文化研究センター主催の第4期日本語パートナーズレセプション(5月12日(木)、18日(水))にて、学術情報メディアセンターが開発したCALL教材の贈呈式が行われた。

今回、60名のタイ第4期の日本語パートナーズへ柴山 守 ASEAN拠点所長からCALL教材「発信型マルチメディア日本語教材「日本の風土と文化」」60組を贈呈した。

贈呈したCALL教材は学術情報メディアセンターの語学教育システム研究分野・壇辻研究室が開発したマルチメディア多言語語学学習教材で、英語、中国語、タイ語で日本の紹介ができ、日本の文化や風土、京都を紹介する内容で構成されている。

国際交流基金アジアセンターの日本語パートナーズ派遣事業は、日本語教師・学習者のパートナーをASEAN諸国に派遣し、日本語授業のアシスタン



教材の贈呈

トや日本文化の紹介を行っている。タイ第4期のパートナーズ60名は全国32県の中等教育機関に派遣され、現地の言葉や文化についても学びを深め、日本とタイを繋ぐ架け橋としての役割を果たすことを目指している。

本式典で国際交流基金から配付された資料によると、タイの高校での日本語学習者数は約9万人であり、全外国語中第5位の人数にのぼり、今後さらに日本からタイへ日本語教育支援の貢献が期待される。

関連リンク

マルチメディア多言語CALL教材(文化発信型コンテンツ)の開発

Development of Multilingual Multimedia CALL Materials-Introduction to Japanese Traditional Culture

<http://ict-nw.i.kyoto-u.ac.jp/ict-innovation/10th/panel/panel.php?id=25>



記念集合写真

(企画・情報部(企画課))

平成28年度京都大学創立記念行事音楽会を開催

6月18日(土)の本学創立記念日を祝し、第60回京都大学創立記念行事音楽会「飯田みち代ソプラノ・リサイタル《ウィーン世紀末逍遥》」を6月17日(金)に京都コンサートホールで開催した。

今年度はソプラノの飯田みち代氏(本学ハイマート合唱団OG)、ピアニストの大井浩明氏にご出演頂き、Gマーラー：《リュッケルトの詩による5つの歌曲》やR.シュトラウス：《4つの最後の歌》など有名な歌曲を中心に、優雅で美しい歌声と素敵なピアノの演奏の全6曲目に加えて、アンコール曲目も披露された。演奏後のアンケートでは、「大ファンになりました」「魂がこもった曲と演奏でした」といった感想が多数寄せられた。会場に来られた方々は、2人が奏でる音楽の世界に魅了され、しばしの癒しの時間を過ごされた様子であった。



飯田みち代氏



演奏の様子



大井浩明氏

(教育推進・学生支援部(厚生課))

資料

平成28年度 総長裁量経費による採択事項

平成28年度の総長裁量経費については、下記の36件が採択された。

採択事項および対象部局等は次のとおりである。

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
卓越した課程博士論文の出版助成事業	文学研究科	
京都で学ぶ人文学(英文名: Learning Humanities @ Kyoto)	文学研究科	
若手研究者出版助成事業	教育学研究科	
法の実質化と自由の脱形式化をめぐる法的課題	法学研究科	
若手研究者に係る出版助成事業	法学研究科	
共生社会の実現に向けた知的グローバル(Global × Local)リーダー育成のための国際連携・部局横断型短期集中講座の開催	経済学研究科	農学研究科, 文学研究科
若手研究者の優秀学位論文等出版事業	経済学研究科	
地域との交流を窓として世界を展望する学生育成事業	理学研究科	
理学からのオープンデータ推進と実装	理学研究科	
医学教育学専門職修士課程設立に向けての国際ネットワーク構築	医学研究科	
国際的に活躍する保健学(看護学)の研究者・実践者養成につながる高校生対象の教育プログラム	医学研究科	
多様かつ柔軟なキャリア形成に向けたレイトスペシャリゼーションの情報発信	薬学研究科	
ASEAN 環境教育拠点強化事業	工学研究科	
入学志願者・留学希望者をターゲットとする情報発信事業経費	工学研究科	
若手研究者出版助成制度	人間・環境学研究科	
本学の国際地域協働研究ファシリティの国際発信強化によるFuture Earth 研究推進事業	情報学研究科	東南アジア研究所, 地球環境学堂, 生態学研究センター, 工学研究科, 農学研究科
地球環境学堂出版助成制度	地球環境学堂	
若手研究者による人文科学諸分野の優れた研究成果の刊行助成事業	人文科学研究所	
「京都学派」の批判的継承とその新展開	人文科学研究所	
文部科学省での展示・ミニレクチャー, 東京都内での公開講座の実施	防災研究所	
東南アジア研究に関わる若手出版助成	東南アジア研究所	
電子ジャーナル認証システムのセキュリティ向上事業	附属図書館	
HeKKSaGOn+(ヘキサゴン・プラス)による外国語学習・異文化理解促進を目指した国際化推進事業	学術情報メディアセンター	国際高等教育院, 人間・環境学研究科, 情報環境機構
マイクロフィルム電子化による貴重資料のデジタルコンテンツの拡充	学術情報メディアセンター	経済学研究科, 農学研究科, 人文科学研究所, 東南アジア研究所, 地域研究統合情報センター, 大学文書館
原発事故後リスク事象に対応したコミュニケーションシステム構築	放射線生物研究センター	

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
フィールド人文社会学の創成と学際融合推進プロジェクト	フィールド科学教育研究センター	
専門職社会人を対象としたこころの科学教育セミナー(「こころ塾」)事業	こころの未来研究センター	
日本科学未来館、環境省、連携動物園・水族館・研究機関との協力による「野生動物保全研究情報」の社会発信	野生動物研究センター	
教養共通教育での新しい情報学教育用電子教科書開発事業	国際高等教育院	
全学共通科目の生物系コア科目における共通教科書作りに向けた図版作成	国際高等教育院	
障害のある学生への支援体制強化事業	学生総合支援センター	
京都大学アフリカ研究出版助成	アフリカ地域研究資料センター	
「アフリカ京都大学同窓会」ネットワークの設立準備事業	アフリカ地域研究資料センター	
「京大らしさ」の具現化としての学術分野越境実践活動	事務本部(企画・情報部[学際融合教育研究推進センター])	
プレス・ツアーの実施と学内広報物の英語対応事業	事務本部(企画・情報部)	
エネルギー・温室効果ガスの見える化と運用システムに関する学内制度設計事業	事務本部(施設部[環境安全保健機構])	

(財務部(財務課))

お知らせ

『京大広報』改訂について

学内向け広報誌『京大広報』は、大学紛争当時の昭和44年の創刊以来、学内構成員(教職員、在学生)を対象とし、正確な学内情報を提供することを目的として刊行されてきました。

平成24年より事務改善の一環として、印刷部数を11,500部から5,000部に削減し、PDF版によるWeb閲覧を中心とする方式に切り替わりました。これにより、実質的な教職員への配布がなくなりましたが、今回これを徹底し、本号をもって印刷を全て取り止めます。しかし、現在も京大Webサイトにおいて相当数のアクセスがあり、執行部の考えやその時々には本学で何が行われているかが一覧できるという利点を有し、アーカイブも容易なことから、その時々京大の姿を後世に伝えるものとして、引き続きPDF版を発行し、京大Webサイトに掲載するとともに附属図書館学術情報リポジトリに登録します。

誌面は、これまで同様、学内情報を正確に伝えるとともに、OBや学内関係者からのメッセージなどを掲載してまいります。『京大広報』は創刊以来、各部局、各部署からの寄稿により支えられてきましたが、改訂後も変わりはありません。引き続き、各部

局、各部署よりニュース、資料などの記事の積極的な寄稿やコラム執筆者の推薦をお願いします。

□変更概要

- ・『京大広報』の紙媒体としての発行を平成28年7月号までとし、記事の一覧性の特性を生かしたPDFファイルを『京大広報』としてホームページ上に掲載。(PDF版のみの発行)
- ・発行を年6回(奇数月)に変更し、号外は廃止。

□掲載項目

- ・掲載項目は、これまで同様、本学の執行部の考えや公式見解、学内外からのメッセージ、本学のニュースや情報を網羅的に掲載。

□附属図書館学術情報リポジトリによるアーカイブ

- ・附属図書館学術情報リポジトリに『京大広報』PDF版を登録。
- デザイン等
- ・デザインを見直すとともに、Web閲覧を考慮し、全体として読みやすく、わかりやすいものになるようリニューアル。

(企画・情報部(広報課))